



2024 優勝エッセイ賞

佳作 (GⅢ)  
受賞作

# 油断してはならぬ

徳田 金太郎

受賞のことは

子供の頃から作文が苦手な私が、人生初応募した文学賞が昨年の本賞です。作品は予選通過後、入賞には届きませんでした。それを両親に報告した所、作文が苦手な父は「予選通過？俺の子が？」と驚き、筆まめな母は「生産牧場は私だもの！書ける人なのよ」と励ましてくれましたが、読みたいとは言いませんでした。  
そんな親に結果を伝えたら今年は読みたいと言うでしょう？この度は賞を頂き、ありがとうございます。

## プロフィール

数年前、作文練習用にnoteを始める。10代で始めた乗馬はセンスが無く、練習に飽きると愛馬と森の中を駆け回っていた不良部員。好きな馬は「乗ったことがある馬全部」。  
最近ZINE作りに目覚め、馬の本を制作中。

「誘導馬でポートって馬いたよね？この顔、そうじゃない？牧場にいらしいよ」

そう私に連絡をくれたのは、学生時代、馬術部で同じ釜の飯を食った仲の先輩だった。一緒に送られてきた写真には、競馬雑誌に掲載された記事をスマホで写したもののだろうか。重賞を勝った事もある有名な引退競走馬が牧場でのんびりする姿の後ろに、黒鹿毛の顔に白いハート型の模様が入った特徴的な顔が写っている。

こんな特徴を持つ顔の馬はそんなにいない。間違いなくアイツだ！まだ生きていたんだ！

インターネットでその名を検索すると、北海道の岩内という場所にある現役を引退した馬たちが余生を過ごす牧場がヒットした。急いでその牧場に電話をかける。

「昔、ポートブライアンズがいた乗馬厩舎に所属していた者ですが……」

十代の夏、私は学生になってから始めた馬術部が縁で、競馬場に附属する乗馬厩舎にアルバイトとして出入りするようになっていた。その厩舎にいたのが、競走馬を引退し乗馬になり、レースに出る競走馬を先導する「誘導馬」の候補生として訓練中だったポートブライアンズ。馬術部の

学生から「ポート」「ポー」と呼ばれ可愛がられていたが、ポートは臆病な性格なのか落ち着きが足りず、やや気性が荒い馬だった。

そんなポートの訓練担当は、白い歯を見せてニカッと笑うと、素敵な笑顔が谷村新司そっくりな中年の乗馬コーチ。私たち学生からは「先生」と呼ばれていた。

先生はポートを調教する際、当時厩舎で一番下っ端だった私を練習の際に障害を上げ下げする「箱番係」として連れて行き、競走馬が乗馬に転身する訓練を間近に見せてくれた。

ゆっくり歩いたり、走ったりした後、人間の指示で止まる事。障害物は真ん中を飛ぶ事、飛んだ後は指示されたらきちんと止まる事。時おり、我慢ができずちよつとした事で走り出しそうになるポートをグツと抑え、乗馬として生きるための「いろは」をひたすら教え込む先生。

調教中、やんちゃな仕草をするポートを見ると、下っ端ながらに「この馬は誘導馬どころか、乗馬にさえ向いていないのでは？」という疑問がわいてくるが、真剣な先生と馬を目の前になると、そんな事は口にできない。

しかし、どこかで私の心の声が漏れていたらしく、練習を終えた先生が、ポートの首をこちらに向けて話し始める。

「ポートは『逃げ馬』だったから気性が荒いんだ。追ってくる後続馬を振り切って重賞を勝った馬だぞ？ここに来てすぐの頃、俺を乗せたまま立ち上がってさ、そのまま一瞬で後ろに馬ごとひっくり返った時があつて。俺は馬と地面に挟まれて病院送りよ。何をするか分からないから、油断ならない馬だよ。正直、誘導馬には向いてないな」

「向いていないのに誘導馬になるんですか？」

「誘導馬に『なる』んじゃないんだよ。『する』んだよ！競馬場じゃ役目が無い馬は置いておけないだろう？」

どの馬よりも速く走る事を使命とする競走馬、中でも「逃げ馬」として馬群から抜け出すような勝ち気な競走馬だったポート。それがレース前に興奮する競走馬の隣を歩いても、絶対に動じない冷静さが求められる誘導馬を目指すとは。引退競走馬として次の馬生を歩むためとはいえ、馬にも向き不向きはあるだろう。この気が荒い馬が穏やかな誘導馬になれるだろうか。乗馬を始めたばかりで下っ端の私には想像もできなかった。

「競馬場で第二の馬生を過ごせるよう、誘導馬に転身させる」と心に決めた先生の調教は毎日続いた。乗馬、誘導馬としての役割を覚えるため、淡々と歩き、走り、止まり、障害を飛び、私たち学生の練習にもつきあう地道な日々だった。

「今日、誘導に使ってみるから」

翌年のある日、先生からの一言で仮免許・誘導馬としてコースに再デビューしたポート。ゴール前の停止位置で観客席の方を向く際、首を高くあげ馬体に力を入れて周囲を警戒する姿は、検量室前から見守る私たちをハラハラさせたが、それも最初のうちだけだった。

その翌年にはコースに出ても落ち着いた姿を見せ、ついに堂々とした誘導馬姿をファンに披露するまでになっていた。パドックで待機している時には、横で世話をする私の肩に顔をこすりつけて遊び、レース前で気が立っている競走馬が目の前にも、あくびをし、昼寝をする余裕も見せてくれた。

あつという間に一人前の誘導馬に成長したポートは、開催日の朝には競馬場の入り口でファンを迎える仕事もこなすようになり、いつの間にか看板誘導馬に成長していた。

あれから十数年。私は学校を卒業し都会で働く平凡な会社員となり、馬とは縁が薄い暮らしをしている。そんな中で思いがけず飛び込んできた、その成長と転身を目の前で見続けた馬の消息。生きているならもう三十歳前後、元競走馬としてはかなり高齢だ。会うなら一日でも早く行かなければ。

そう思うと居ても立っても居られなくなり、電話ですぐに牧場見学をお願いし、北の大地へと向かう飛行機を予約した。

新千歳空港から電車で札幌へ、そこから高速バスに揺られて二時間半、積丹半島のつけ根、漁港のある岩内という町。その町から少し山の方へ入った所にある、引退競走馬が余生を過ごす牧場へ向かう。

牧場に着くと、思いがけず当時同じ厩舎でアルバイトを

していた知人が迎えてくれた。どうやらポートは、この人の縁で牧場へとやってきたらしい。

「生きているうちに来てくれて良かったよ。ポートも三十歳で、目が見えてないから」

十数年ぶりの対面早々、驚きの話を聞かされて少し動揺してしまふ。急ぎ足で放牧地へ向かうと、黒鹿毛に白いハート型の流星、特徴的な顔が可愛らしい馬がこちらを向いて立っている。

近寄ってそっと名を呼ぶと、こちらに顔を軽く向けるが大きな反応は無い。その顔をよく見ると、鼻や口の辺りの黒いはずの毛が白く変わっている。

「ポート、顔さわるよ？」

声をかけて顔に腕を伸ばし、少し薄くなった前髪を右に寄せると、額にあるつむじの周囲も部分的に白髪に変わっていた。誘導馬だった当時と比べると、背や胸のあたりが痩せたようだが、サラブレッドの三十歳は人間の年齢に置き換えると百歳近い。もはや生きているだけで表彰モノだ。

好物の人参を小指ほどに小さく切って与えると、口の中で味わった後、嚙まずに吐き出されてしまった。年を取って好みが変わってしまったのだろうか。驚いた私を見て、知人が苦笑いで教えてくれる。

「人参も好きだけど歯があまり残っていないから嚙めなくて。牧草も口をつけるけど、嚙み切れないから飲み込めない草を吐くんだよ」

口をのぞくと、数えられる程しか歯が残っていない。餌はどうしているのかとたずねると、嚙めなくても食べられる高カロリーな餌を混ぜて何度も分けて与えていると教えてくれた。歳を取ると馬も人も同じようになるらしい。

ポートブライアンズ三十歳。高齢者ならぬ立派な高齢馬である。

放牧地の中、知人と二人でポートを目の前にして当時の

思い出話をしていると、ポートの方も「俺も混ぜろ」と言わんばかりに私たちの間を割って頭を差し込んでくる。日差しがまぶしくなり、馬に背を向けてお喋りをすれば、仲間はずれが不満らしく、私の肩にアゴを寄せ、背中に顔をこすりつけてくる。馬の方も、目の前の人間が自分の事を話題にしているのが分かるのだろう。

「俺を無視するな」とでも言いたげな仕草がなんともいじらしく、可愛いと感じてしまうのは、まだ乗馬見習いで誘導馬としての将来も見えていなかった、やんちゃな時代のポートをそばで見えていたからか。あるいは、私も少し年をとったからだろう。

「ポートが生きているうち、またおいでよ」

そう声をかけられ、山にある牧場から大都会・札幌へ送り出される。ホテルの部屋で今日撮った写真を眺め、過ぎ去った青春を懐かしみ、次はいつ訪問しようかと考えていると、ふと牧場とポートの匂いが鼻をかすめた。においの元を探ると、一番上に着ていたパーカーのフードの辺りから馬の匂いがする。フードに顔を埋め、布を通る空気を胸いっぱい吸い込んでみた。

ああ、牧草の香りの向こうに確かにポートの匂いがする。いなくてもなお、存在を教えてくれる。可愛いやつだなあ。そんな風に思いながらパーカーをハンガーにかけた瞬間、フードと背中の一部がかすかにきらめいた。ポートの匂いはここから出ているらしい。そこは何か乾き、パリパリになっていて……。

ポートのやつ、人の背中で鼻水と目ヤニをふいてくれたな！

「ポートは油断ならない馬だよ」そう笑う先生とポートの顔が浮かんで消えない札幌の夜となった。